

『日本書紀』は「正史」か

池 田 昌 広

一 「正史」と「通史」

『日本書紀』（以下『書紀』と略称）が名義の問題をかかえていることは、研究者のあいだでは通有の知識であろう。問題のありかを端的にいえば、『書紀』の現存古写本がともに「日本書紀」の標題であるのに、その撰上を唯一つたえる『続日本紀』養老四年条が、ただ「日本紀」と呼んでいる齟齬である。これまで、すくなくからざる研究がこの問題を論じたけれど、齟齬の生じた理由を解くにはいたっていない。

書名の問題については、私も関聯史料とおもな学説とを整理して、ある展望を述べたことがある。^① 前稿で主張したのは、つまるところ、『書紀』述作をささえた史学思想が六朝のそれであつたと思しきことである。冒頭に生成論を配した『書紀』の体例は、これまで説かれてきた編年体ではなく、六朝に盛行した「通史」体である可能性が高い。^② 生成論より起筆するのは「通史」の常例であつた。『書紀』の史体が「通史」体であるとすれば、『続日本紀』のしるす「日本紀」は、「紀」を名のことによつて、みづからの史体が「通史」のそれであることを含意させた名義であると領会される。「通史」体史籍は、当時ただ「帝紀」とも呼ばれていたからである。

現在、『書紀』の原題が、「日本紀」であつたか「日本書」であつたか、意見の対立があるわけだが、「通史」との類似を勘案すれば、「日本紀」にみとめる見解が説得力をもつ。『続日本紀』という優先度の高い史料を論拠にし

ていることは、「日本紀」説をいつそう有利にする。ひるがえって、原題を「日本書」とする説は、『書紀』述作者が紀伝体史書を志向したという根拠なき想定を前提にしており賛同しがたい。ただし天平十年ころ、すでに「日本書紀」の呼称がおこなわれていた明白な証左があるし、古写本の標題が例外なく「日本書紀」である事実は重い。

前稿では、これら一見して矛盾に思われる不整合の説明を、「日本紀」から「日本書」への名義の変容をもつてする私案を述べた。原題「日本紀」をみとめたうえで、『日本紀』成書以後に「日本書の本紀」を意味する「日本書紀」の呼称があらわれたと考えれば、関聯史料のあいだにあるくいちがいをうまく説明できる。そして、「日本書紀」命名の動機、換言すればあらたな名称を生ぜしめたきっかけを「正史」概念の将来にもとめた。私のいう「正史」とは、現存文献では『隋書』経籍志（以下、隋志と略称）に初出し、『史・漢』の体例に準拠して、公的な「史官」が著述した紀伝体の断代史¹の類名である。現代日本語で、『書紀』を「本邦第一の正史」などと形容するばあいの「正史」の用法、すなわち「国家によって編纂された正式の歴史書」（『大辞林』第三版）の意ではない。

さて、隋志史部は十三の類目を有するが、その祖型は梁・阮孝緒『七錄』の十二部においてすでに準備されていたようだ。ただし、隋志は『七錄』の分類をそのままつかわず、これに意識的の改変をほどこしている。本稿の論旨にとって重要なのは、隋志が史書の体例上の正統と異端とはつきり分かったことである。のちに記するように、隋志は唐の高宗朝に成ったが、隋志の分類の基本形は、有唐一代のみならずのちの目録にまで踏襲された。影響は本邦の『日本国見在書目録』にまでおよんでいる。

隋志の総序および史部の各小序を通覧すれば、「史官」の盛衰の屢述ぶりに気づくだろう。⁵史部後序なぞは、みな「史官」についての記述にひやかされている。総序は、「史官既立、経籍於是興焉」といい、「先聖」時代以降の「史官」の存在を『周礼』『春秋左氏伝』を援用し強調している。それは、「史官」を史籍著述官にとどめず国家の

正当性を担保する政教理念の供与者にさだめ、唐朝成立の歴史的必然を演出するためであつたと思ひしい。その意図のなかで、「正史」は「史官」によつて著作された正統史という地位をえ、その史体である紀伝体も国家によつて正当性をみとめられた。

隋志「正史」は、『七録』国史部から正統史にふさわしい史書をぬきだし簡条しているが、実はこれにもれた史籍を「古史」「雜史」に分置したようだ。このとき、「帝紀」ものは「雜史」にならべられた。重要なのは隋志の「雜史」への態度である。

其属辞比事、皆不与春秋・史記・漢書相似、蓋率爾而作、非史策之正也。……自後漢已来、学者多鈔撮旧史、自為一書、或起自人皇、或断之近代、亦各其志、而体制不經。又有委巷之說、迂怪妄誕、真虛莫測。然其大抵皆帝王之事、通人君子、必博采広覧、以酌其要、故備而存之、謂之雜史（『雜史』小序）

という「雜史」の散々ないわれ様をみよ。たとえば、『帝王世紀』は「起三皇尽漢魏」（隋志原注）の史籍であつたから、隋志が「迂怪妄誕、真虛莫測」と論断する対象であつた。隋志は、後漢以後六朝に盛行した「通史」体を異端におとしめたのである。

唐朝による史体の評価は、六朝のそれとおおきくちがう。六朝の学術史たるはずの隋志は、実は六朝の学藝を忠実にあらわしていない。『漢書』藝文志以降、漢唐間の書目がごとく亡佚した現在、隋志こそは六朝の学藝を論じるうえで基本文献なのだが、利用に注意を要するのはこの点である。六朝書目のなごりをとどめる『太平御覧』所収「經史圖書綱目」の史書のならびと隋志のそれとをくらべれば、隋志のあたらしさは瞭然である。

『書紀』の編纂が、範を中国に則つた律令国家実現の一翼であつたろうこと、贅言を要すまい。さようしからば、その史体は当時本邦につたわつていた漢土の史学思想のうち最先端のそれをふまえ、ふさわしい体例をえらんだはずである。その結論が「通史」体であつたとすれば、『書紀』編者の選択は隋志の評価といちじるしく異なるとい

わねばならない。隋志に表現される正統観は、「通史」体をしりぞけているからである。『書紀』編者の「通史」体への志向は、史体の選択が意識的であればあるほど、「正史」すなわち紀伝体の本邦での相対的地位のひくさを想像させる。『書紀』の潤色には紀伝体の史書たる『漢書』の利用をみとめるのが通説であるから、『書紀』編者は紀伝体にくれていたにもかかわらず、その重要性を認識しなかったということになる。

『書紀』にほどこされた漢籍による潤色は、編纂の最終段階の造作であつたと思しい。⁽⁶⁾ 劈頭におかれた生成論の潤色もおなじころの所為であつたろうから、「通史」体を重んずる態度は撰上をまづかに控えたころにもゆるがなかつたと考えられる。間もなく、『書紀』は、「通史」体をあらわした「紀」字をふくむ「日本紀」の名義をもつて養老四年に撰上された。このときまでに、紀伝体に重きをおいたしは一つも見られない。

ただ、類目としての「正史」は、『書紀』撰上以前すでに本邦につたわつていた可能性がある。一つはほかならぬ隋志の、二つは『麟台四部書目録』の舶載をみちびくかもしれない史料があるからだ。どちらか一方の将来があれば、『書紀』編者が「正史」の類目を知つていた可能性が考慮される。そこで、養老四年以前の両書舶載の有無を検証しておく。

二 『隋書』の舶載と隋志

『書紀』の潤色に『隋書』の利用されたことは、すでに指摘がある。⁽⁷⁾ 雄略紀・清寧紀に集中する『隋書』によつた文章は、ことごとく高祖紀を出典とし他巻におよばないけれど、『書紀』撰上以前における『隋書』舶載のただ一つの証拠である。この『隋書』鈔本が隋志をふくんでいれば、『書紀』編者は「正史」の文字を見たと考えねばならない。

隋志はいま『隋書』の一部であるが、本紀列伝と志との完成には二十年の時間差がある。『隋書』編纂のあらましは以下のとおりである。唐朝初期は「正史」の編纂ラッシュであつた。武徳五年（六二二）六代史（梁・陳・北魏・北齊・北周・隋の諸史）編纂の勅がくだるも成書にいたらず、太宗即位後の貞観三年（六二九）にあらためて五代史（梁・陳・北齊・北周・隋の諸史）の編纂がはじまる。『隋書』については、魏徵を主編となし顔師古・孔穎達・許敬宗等が編纂にあたつた。五代史はひとしく貞観十年（六三六）正月に成り、あわせて『五代史』と称せられた。これが今日の『梁書』『陳書』『北齊書』『周書』の各書および『隋書』本紀五卷・列伝五〇卷である。ただ『五代史』はおよそ志を缺いていたため、貞観十五年（六四一）勅があり志の作成がはじまる。編纂は太宗在世中におわらず、高宗の顯慶元年（六五六）にようやく完成し、同年五月長孫無忌の名で『五代史志』三〇巻が上進された。これが現行の『隋書』十志である。『隋書』への編入がいつであつたか詳らかでない。

隋志の成立が顯慶元年である事実から、『書紀』編者の手にした『隋書』鈔本は、志をもたない貞観十年に成つた五十五巻本であつた蓋然性が高い。以下はその考証である。

東野治之は、『書紀』撰上時、高宗朝以降の唐鈔本の舶載がそれほどさかんでなく、本格的舶載はややおくれるという見方をしめした¹⁰。その論拠としてあげられたのは、『書紀』の顯宗紀ほかの文章と、その出典たる漢籍との用字のちがいである。『書紀』の潤色に参照された范曄『後漢書』と『隋書』とは、唐太宗の名「世民」の「民」を避諱しないテキストであつたようだ。この「民」字のあつかいから、件の『隋書』の鈔写時期が推定できるのだ。さきに、その史料三箇条を左に記す。

A 是時天下安平、民無徭役、歲比登稔、百姓殷富、稻斛銀錢一文、牛馬被野。
(顯宗紀、二年十月)

A' 是歲天下安平、人無徭役、歲比登稔、百姓殷富、粟斛三十、牛羊被野。

(『後漢書』卷二、明帝紀、永平十二年)

B 車駕還宮、每所到行、輒会郡県吏民、務勞賜作樂。

(持統紀、六年三月乙酉)

B' 每所到幸、輒会郡県吏人、勞賜作樂。……十二月丁亥、車駕還宮。

(『後漢書』卷三、章帝紀、建初七年十月癸丑)

C 今星川王、心懷悖惡、行闕友于、古人有言、知臣莫若君、知子莫若父、縱使星川得志、共治[○]家國、必當戮辱
遍於臣連、酷毒流於民庶、夫惡子孫、已為百姓所憚、好子孫、足堪負荷大業、此雖朕家事、理不容隱。

(雄略紀、二十三年八月丙子)

C' 勇及秀等、並懷悖惡、既知無臣子之心、所以廢黜。古人有言、知臣莫若於君、知子莫若於父。若令勇・秀得
志、共治[○]家國、必當戮辱偏於公卿、酷毒流於人庶。今惡子孫已為百姓黜屏、好子孫足堪負荷大業。此雖朕家
事、理不容隱、

(『隋書』卷二、高祖紀下、仁壽四年七月丁未)

右掲 A' B' C' は長文にわたる類似から、おのおの A B C の出典とされる。A B C の「民」字について、出典たる漢
籍の現行本はともに「人」に作る。『書紀』の複数の潤色文が、「人」を「民」にあらためる必要がないところで
「民」に作っている事実をどう解釈するか。これは東野のいうように、『書紀』述作者の参照した漢籍鈔本が、当
該部分をそもそも「民」に作っており、『書紀』の用字はただそれを写しているにすぎないと解するのが穩当だ。
とすれば、『書紀』述作者の見た A' B' C' の鈔本は、太宗の名「世民」のうち「民」を避諱しない時期の鈔写であつ
た可能性が生じる。

唐代の避諱字が宋本以降にもそのままつたえられた例がある。⁽¹²⁾ 宋代に書籍が上梓されるばあい、唐代の避諱字を
元字に復し宋代の避諱字をあらたに避けるのが原則である。ただし、現存する宋本を観察するに、元字への恢復は
かならずしも嚴格ではなかったようだ。改変を要しない文字を唐諱の代字に誤解しわざわざ予想される元字にあ
らためたり、⁽¹³⁾ 反対に唐諱の代字を見のがし、そのまま印刷した過誤もあった。さきの A' B' C' は後者の事例であり、宋

人が刊刻の際、底本の避諱代字をなおし忘れたのである。右の例は、『書紀』が潤色に利用した漢籍の文章が唐諱をふくむこと、宋代の漢籍印行時当該文の代字の改変が見落とされたこと、以上二つの条件を同時にみたす稀有な例と思われる。勿論、漢籍と『書紀』潤色部分との関係が明らかになっていることが大前提だ。右に引いた出典以外にこのような事例は今のところ見つからない¹⁴。

テキストの書写あるいは刊刻の時期を特定するのに避諱は貴重な情報を提供するが、利用には慎重を要する。法的規定と避諱の実相とがつねにひとしいとは限らないからだ。特に避諱していないことから鈔写時期を特定するばあい、避諱の実施率の調査と他要素からの補足が必要である。Cの出典であった「民」を避けない『隋書』高祖紀の鈔写時期を推定するには、まず『書紀』のなつた養老四年＝開元八年以前の漢土における、「民」の避諱に関する法的規定と避諱の実態とを明かさなければならない。

南宋・陸游『老学庵筆記』卷十に左記のごとくある。

唐初不避二名。太宗時猶有民部、李世勣・虞世南皆不避也。至高宗即位、始改為戶部。世南已卒、世勣去世、字、惟名勣。或者尚如古卒哭乃諱歟。

陸游のメモは、太宗の名「世民」のあつかいの変化をいつている。太宗在世中、「世民」連続のばあいのみ避け「世」「民」単字は避けなかったのが、高宗朝にいたつて各単字をも避諱しはじめたという。「卒哭乃諱」は『礼記』曲礼上「卒哭乃諱、礼不諱嫌名、二名不偏諱」に典拠し、避諱の典実としてしばしば引かれる。

「世」「民」単字の避諱規定の草創を高宗朝におく理解は、すでに大量の言及があつて定見といつてよい。東野が前引ABCの出典漢籍について、貞観年間頃以前鈔写のテキストを主張するのも『史諱举例』の同様の指摘によつている。陳垣『史諱举例』は歴代の避諱研究を集成し工具書としていまなお有用だが、著作時期のふるさ(民国二十二年勵耘書屋刊)から伝世文献の博搜にかたむき、墓誌銘など近年の出土文献による成果が反映されていない

憾みがある。以下、『史諱举例』にくわえて布目潮風および中村裕一の研究にみちびかれ、「民」字への対応を中心に唐初の避諱について概観しておく。¹⁵⁾

まず避諱の法的規定について。唐律のなかで避諱にふれた条文は『故唐律疏議』卷十、職制にある二条、このうち注目されるのは職制第二五条「上書奏事犯諱」にみえる律文「若嫌名及二名偏犯者、不坐」なかんづく「二名偏犯者、不坐」の文字である。当該律文を解説した疏議「及二名偏犯者、謂複名而单犯並不坐」の要点は、宗廟の諱が二字のばあい、そのうち一方の一字をおかしても無罪というにある。たとえば、諱が「世民」のばあい、「世」「民」両字を連続して「世民」と表記すれば有罪、「世」もしくは「民」単字の表記は無罪ということである。

職制律にならんで重要な記事が『冊府元龜』にのこされている。同書卷三、帝王部、名諱に収載された左記の令書である。

令曰、依礼、二名義不偏諱。尼父達聖、非無前指（旨）、近代以来、曲為節制、兩字兼避、廢闕已多、率意而行、有違經誥。今宜依拠礼典、務從簡約、仰効先哲、垂法将来、其官号人名、及公私文籍、有世及民兩字不連讀者、並不須避。

『唐会要』卷二十三「諱」も、本令書を節略し武徳九年六月の下令として収める。¹⁶⁾ 武徳九年六月ということとは、これは玄武門の変直後の令書である。その要は、当時二名の各単字が避諱されていた現状を違経にみとめ、曲礼の「二名不偏諱」に復するよう命ずるにある。すなわち、「世」「民」単字の避諱不要を再度公的に規定したのだ。全権を掌握した李世民が、皇太子「建成」時代の弊害にかんがみ、自身の名「世民」が頻用の文字であるために起こるであろう混乱をふせぐための措置と思しい。

それでは、右に見た「二名義不偏諱」の規定はどれほど実行されたのであろうか。「世」「民」を中心に避諱の実相は如何。

結論をいえば、太宗在世の貞觀中、武徳九年六月の規定は碑文にまでおよび、かなり徹底して実施されたようである。若干みえる例外は、個人の発意による私的な避諱で限定的であつたと判断される。つまり「世」「民」単字は太宗在位中には避けられず、「世民」と連続するばあいのみ避諱されたと考えられるのだ。変化は高宗期に生じる。

貞觀中、太宗の名「世民」が単字では、法制上また實際でも避諱されていなかったとすれば、貞觀十年になつた官撰の『隋書』本紀・列伝は、成書時には「世」「民」をば避けずそのまま表記していたはずである。¹⁷『書紀』の利用した『隋書』高祖紀が「民」を避諱しないのは、東野のいうとおり、それが『隋書』原撰本の用字を保つた鈔本であつたからと結論するのが妥当だ。しかし『五代史志』は太宗の崩後になり、「世」「民」両字のあつかいにはやや変化がみとめられる。

『隋書』卷二十八、百官志下は「民部」につくるべきところを「戸部」に表記する。これについて『通典』卷二十三、職官典五、戸部尚書が、「開皇三年、改度支為民部、統度支・民部・金部・倉部。國家修隋志、謂之戸部、以廟諱故也」といい、『五代史志』がその完成当初より隋の「民部」を「戸部」にあらため記していたことが領會される。また、『旧唐書』高宗紀、貞觀二十三年六月辛巳（八日）条に「改民部尚書為戸部尚書」とある。太宗はその前月五月己巳（二十六日）に崩じているから、曲礼の「卒哭乃諱」にしたがつた避諱にまず思われるが、問題は法規定との關聯である。これらについて中村は、「單なる官府名と官名變更であり、「民」字の避諱全般に關わるものではない」と避諱の限定性を強調した。

中村によれば、「世」「民」單字が避諱されるのは顯慶二年（六五七）十二月以降である。王鳴盛は、『旧唐書』卷四、高宗紀上、顯慶二年十二月庚午条「改昏葉宮」を「改昏葉字」の誤字とし「必是以昏字之上民字・葉字之中世字犯諱、故改昏從氏、改葉從冊」という。¹⁸陳垣は「其說近是」と王說に賛意をしめすが、中村はこれを進めて、

当該詔令の内容は「改民世字」をもふくむと解釈する。墓誌銘等の調査からも「唐初より顕慶二年までは「世」字が頻用されるのに、顕慶三年以降の墓誌銘には使用されなくな」り「昏」字に関連する字も同様であり、顕慶三年以後は「昏」字が使用されるようになる」ことを確認する。高宗紀はただ「改昏葉字」というのみで詔の原文は不明であるが、中村は顕慶二年十二月の詔を「世」「民」単字避諱の公式規定に結論するのだ。これは前述職制律および武徳九年の規定が、顕慶二年十二月事実上無効になったことを意味する。

中村にしたがえば、『書紀』の潤色に利用した「民」を避諱しない『隋書』鈔本（転写本を利用のばあいはその祖本）の鈔写時期は、顕慶二年十二月以前の可能性がきわめて有力になる。舶載時期も上限が『隋書』五十五巻のなった貞観十年＝舒明八年（六三六）、下限は顕慶二年＝齊明三年になる。これと遣唐使の派遣時期とを勘案すれば上下限はいっそうせばまる。上限が第二次遣唐使の帰国すなわち永徽五年＝白雉五年（六五四）、下限が第三次遣唐使の帰国すなわち翌永徽六年＝齊明元年（六五五）になる。¹⁹ 重要なのは、その当時『五代史志』が未完であったことだ。

ここで、私は附言しなければならない。実は高宗朝以後に「世」「民」を避諱しなかった一時期がある。則天武后の周代である。六八三年末の高宗病歿から七年をへた天授元年（六九〇）、武后は新王朝「大周」をおこした。武周は神龍元年（七〇五）中宗が復位し国号が唐に復せられるまで存続したが、そのあいだ武氏の廟諱および生諱が避諱された。問題の「世」「民」は、中村によれば避諱されていなかったと結論できる。武周の存在は唐の光復後完全に否定されており、唐諱の対処も当然武周以前にもどされた。

大宝度の遣唐使（第七次）の派遣は武周末期にあたり、「民」を避諱しない『隋書』の舶載が可能である。武周時代にはすでに『五代史志』は完成しており、『隋書』に附属されていた可能性がある。仮に第七次遣唐使が『隋書』を将来したとすれば、「民」を避諱せず且つ十志をふくんだ『隋書』をもちかえられる。第七次遣唐使の帰朝

は慶雲元年（七〇四）と同四年（七〇七）との二回で、七二〇年撰上の『書紀』の編纂に十分参照されうる時間的の余裕がある。また、正倉院蔵『王勃詩序』、『文館詞林』残巻には則天文字が使われているので、同次遣唐使の將來品と考えられ、舶載の実績がみとめられる。

しかし、『書紀』にのこる『隋書』鈔本の痕跡は、右の想定にとって不利である。まず着目すべきは「詔」字の使用だ。小島憲之によれば、『隋書』からの潤色は雄略紀の後巻清寧紀にもみとめられる。⁽²⁰⁾ それらもすべて『隋書』高祖紀に典拠するが、そのうち清寧紀三年十月乙酉条と同四年九月丙子条とに「詔」字がみえる。出典と思しき『隋書』高祖紀開皇元年三月丁亥条と同開皇六年九月辛巳条とは、現行本も「詔」字につくり清寧紀におなじい。しかし「詔」は武周では使用がみとめられなかった文字なのである。

唐代の官文書にもっとも影響をあたえたのは、実に「世民」と「嬰（＝照）」であった。後者は、頻用の「詔」が武后の名「嬰」に原義をおなじくし音通であるため、嫌名として避諱されたからである。「詔」字は避諱されるばあい、同義の「制」に代字されることが多かった。⁽²²⁾ 『書紀』が参照した『隋書』が武周鈔本であったとすれば、清寧紀の二箇所の「詔」字はあらわれないはずだ。清寧紀の「詔」字は、当該高祖紀が武周鈔本でないことを語っている。厳密には前述したように、「詔」が避諱されていないことからみぎの結論をみちびくには、前提として当該字の避諱の実施率が高いことを明かさなければならぬ。今の私にはその用意がないが、憶見の補強材料はいくらある。それは、『隋書』によった『書紀』の文章に則天文字が見られないことだ。

則天文字、都合十七字は五次に分かつて制定されたが、第七次遣唐使の発した大宝二年（七〇二）にはすべて出そろっていた。⁽²³⁾ 前引雄略紀二十三年条には『隋書』出典文の文字を流用した「臣」「国」各一字が見られる。また同紀二十年条に『隋書』高祖紀卷頭部分によった「臣、每見之」の表現がある。⁽²⁴⁾ 「臣」「国」にはおのおの則天文字「𠂔」「囯」が制定されたが、『書紀』の用字は常体字である。

忠則天文字の使用は漢土においても恣意的であつたとされ、本邦での漢籍鈔写においても則天文字は適宜常体字に翻字されることがあつたようだ。⁽²⁵⁾したがって、「忠」「圀」につくつた『隋書』の文字づかいを、潤色に際して、「臣」「国」に翻字した可能性は論理的には否定できず、利用した『隋書』鈔本の則天文字使用の有無について、追求はここにとどまらざるを得ない。しかし、「詔」字の存在と常体字「臣」「国」の使用と、この二つの条件を同時にみたし無理なく説明する解法が、潤色に利用した『隋書』の非武周鈔本説であることは是認されよう。反対に武周鈔本をいうためには、この二つの条件の符合について何らかの説明をしなければならぬ。

以上を要するに、前引Cの出典である『隋書』は武周鈔本ではなく、したがって第七次遣唐使の舶載品でなかつたとするのが穏当な理解だろう。当該『隋書』はやはり顯慶二年十二月以前の鈔写に考えるべきである。⁽²⁶⁾ここにはじめて、Cの出典たる『隋書』高祖紀の舶載が六五四四年あるいは六五五年であつたと、高い確率をもって推定することができた。⁽²⁷⁾そこに未完の『五代史志』がふくまれることはあり得ない。

三 「正史」への志向と吉備真備

前章の考証によつて、『書紀』述作者の手にした『隋書』鈔本は、志をもたない貞観十年になつた五十五巻本であつたと推定できた。これをもつてただちに、養老四年以前に隋志が舶載されていなかったとはいえないが、すくなくとも隋志がもたらされていた証拠は皆無といえるし、隋志の将来が『書紀』撰上以降であつた蓋然性は高まつた。

さて、もう一つの『麟台四部書目録』一卷について述べよう。「麟台」とは、『通典』卷二十六に「天授初改秘書省為麟台、神龍初復旧」とあるように、武周時代の秘書省のことである。この書目は、武周時代の秘閣の蔵書目録

ということになる。現存漢籍中には名を見ないようだが、日本への舶載は確実である。『日本国見在書目録』簿録家に「麟台書目録一」とあり、後述する『弘決外典鈔』巻頭「外典目」の割註が「麟台四部書目録」を引いている。隋志以降の秘閣の書目であるから、隋志にならった分類であろう。当然、史部の頭には「正史」類が配やされていたはずである。

舶載時期は明らかでないが、大宝度の遣唐使がもちかえった可能性が高い。さきに述べたように、中宗の復位後武周の存在は完全に否定され、すべてが旧に復された。秘閣の書目の入手などはそう易くはなからうし、まして武周の書目を中宗の復位後に得るのは困難であつたろう。また、『麟台四部書目録』は『旧唐書』経籍志に著録されていないので、旧志のもとづくところの『古今書録』にも名を見なかったと推される。開元年間になつた『古今書録』が然りとすれば、玄宗朝下に入唐した第八次以降の遣唐使にとって、該書の入手は非常にむづかしかつたはずだ。すなわち、武周期をのがしてこの書目を手にいれたとは考えにくいのである。

舶載時期の推定にあやまりがなければ、『麟台四部書目録』は『書紀』撰上の十六年前あるいは十三年前に日本にもたらされていたことになる。ということとは『書紀』述作者に「正史」の類目は知られていたと考えるべきだ。しかし注意を要するのは、「正史」の類目をもつた漢籍目録の将来と、「正史」概念の重要性を認識することとはおなじでないという点である。史部の冒頭に「正史」とあつて、史書らしき書名がならんでいる様を見ただけでは、「正史」が正統史であるとか、その史体こそが正統であるとかの認識は得られない。「正史」の文字を目にしただけでは、その地位は十分理解されないのだ。同様に、「雜史」類の書名を見ても、その史体が異端であるとはただちに分からないのである。それを知るには、最低限隋志小序のごとき解説文が必要だが、『麟台四部書目録』にはそれはなかったと思われる。わづか一卷というおおきさでは、秘閣の蔵書名を羅列するのがせいぜいで、それさえも網羅的であつたかどうかたがわしい。

前稿でも述べた、「正史」概念の将来とはどういうことか。それは、日本において「正史」にこめられた思想が領会されてはじめて将来されたといえるのであって、箇条の順次や文字づかいからおぼろげに分かる程度では、「正史」概念が将来されたとはいえない。実はそれには、目録を読解く技術が附随してもたらされていなければ困難である。書目を読むには、専門的の知識が不可欠なのだ。「麟台四部書目録」が『書紀』撰上以前に舶載されていたとしても、「正史」の思想はおそらく理解されなかつただろう。

これまで述べ来たつた、隋志と『麟台四部書目録』との舶載についてまとめるところなる。「正史」「雑史」についての解説文（小序）をそなえた隋志は、『書紀』撰上以降初伝の可能性が高い。『麟台四部書目録』は『書紀』撰上以前にもたらされだろうが、「正史」「雑史」分置の思想を理解するための情報にとぼしかつた。これらは、『書紀』撰上以前に「正史」への志向がうかがえないことと軌を一にする。やはり、『書紀』撰上以前は、六朝「通史」への志向がつよかつたと総括できそうだ。

しかしながら奈良時代の、『書紀』撰上後のある時期以降は、紀伝体への志向を豊富に且つはつきりとたどれるのである。一例として、平安初期には紀伝道とも呼ばれ、のち公称となつた学科のはじまりをあげよう。現存文献中「紀伝」の用例は奈良時代末までしかさかのぼれないようだが、紀伝科ともいうべきものの実体は、おそらくとも奈良時代なかばにはあつたことが知られる。天平二年「文章生」の名称が初見されるが、その学習は『文選』『爾雅』の読書が主であつて史書は従であつた。のちに主従が転じて「文章」の文字は「紀伝」におきかえられるけれど、背景には紀伝科志望の学生の増加があつたろうと推察される。紀伝科は平安時代の道観念の成立後、紀伝道の正称をもつて公式の学科となつた。奈良時代の紀伝科の教科について、詳細を明かす史料を見ないが、紀伝道の主たる教科が「正史」のなかでも特に重んぜられる三史であることから、紀伝科も同様であつたろうとされる。「紀伝」の語からもそれは支持されよう。紀伝科の成長から、紀伝体史籍への志向が如実にうかがえる。『書紀』撰上

以前とは、おおいに様相が異なるといわねばならない。注目すべきは、史学の重視が吉備真備の伝学の結果と推測されることだ。⁽³⁰⁾

「日本書紀」の書名をすなおに訓めば、『日本書』の「(本)紀」となるだろう。おおくの論者がそう訓んできたし、私も前稿にてこの訓みには賛意をしめた。「日本書の紀」と訓むのがただしければ、命名者は「日本書紀」をば紀伝体の史書の本紀にみなしたことになる。命名の原理は、おおく「○○書」をなめる紀伝体のそれに無縁とは考えられない。⁽³¹⁾「日本書の紀」の名義の背景には、諸研究がすでにいうように、紀伝体史籍への志向が読取れる。これは紀伝科の成長と軌を一にする。

以上をふまえれば、「日本紀」の「通史」体への志向と、「日本書紀」の紀伝体への志向とのあいだには、断絶があるといわねばならない。この断絶は、「通史」の盛行した六朝の史学と、紀伝体の正統をみとめる唐の史学との体系のちがいによく重なる。現存文献中ではじめて「正史」の類目をおいた隋志は、上記のごとく六朝の学藝を忠実に表現していない。隋志史部のもとづくのは、六朝ではなく唐のあたらしい史学である。

さて、吉備真備による漢籍の舶載はよく知られる。真備は養老度の遣唐使にて唐にわたり、十八年のながい留学のあいだに蒐集した漢籍をもって帰国した。将来書の名称は断片的にしかわからないが、真備とともに入唐し同時に帰国した玄昉の将来書「経論五千餘卷」に匹敵する規模であつたろうことは、しばしば指摘されるところである。そもそも二人の留学は、外典の蒐集を真備に、内典の蒐集を玄昉におのおの命じての派遣であつたと推察するむきがおおい。このとき真備は三史をもちかえっているようである。⁽³²⁾紀伝科流行のはじまりに真備の伝学があつたことは、蓋然性が高く大方の賛同がえられよう。

三史の舶載は、たしかに紀伝体への志向をうながした重要な因素であつたにちがいない。しかし真備帰朝の意味は、たんなる書籍の舶載にとどまらないと思われる。真備が在唐時に目録学を修めていると推知されるからだ。目

録字は、ただ典籍の分類法を論じる学問ではなく、漢籍目録は書名の羅列ではない。学藝の鳥瞰図なのである。目録には当時の学藝の体系が表現されている。漢土において目録学という特別の学問を成立せしめた因がここにある。真備の帰朝は書籍の将来にとどまらず、盛唐の学問体系の将来をも意味した。

在唐時の真備が師事したらしい趙玄黙なる人物は、陽嶠の推薦で学官に就任し「名儒」「名儒冠」と称揚されたうちの一人だが、注目すべきは玄黙が目録学に明るかったことだ。開元初、秘閣の典籍を「分部撰次」した際、担当した学者の一人が「直国子監趙玄黙」である。この整理作業は『群書四部録』二百巻に結実するが、「草定四部」から『群書四部録』成書にいたる曲折に、玄黙が具体的にどう関与したかは明白でない。³³『群書四部録』（佚書）は「開元四部書目」「開元四部録」とも称され、これを略編したのが先述『古今書録』である。『古今書録』の分類は隋志とほとんど変わらないので、玄黙から真備への教授内容に、隋志とおなじ目録学的知識がふくまれていたことは疑いを容れない。³³菟書を留学の重要目的としたらしい真備にしてみれば、目録学の習得は望むところであつたにちがいない。真備のまなんだ史部の体系は、紀伝体を「正史」に位置づけ六朝「通史」の異端を説いた内容のはずである。目録学にくわしい真備だからこそ、紀伝体の正当性を奈良の学界につたえ、三史を中心とする「正史」学習の気運をつくりえたのだらう。

本邦における「正史」の重要性の認知は、おそらく真備の最初の帰朝にはじまる。「正史」概念の将来者として、真備はまことにふさわしい人物だ。その真備が帰朝したのは天平七年（七三五）である。『書紀』撰上の養老四年（七二〇）と、「日本書紀」の初例とされる「古記」の成つた天平十年（七三八）ころとにはさまる時期の史事であつた。

四 『書紀』の「正史」化ということ

さて、隋志の初伝も真備の一回目の帰朝時ではなかったらうか。

具平親王『弘決外典鈔』（以下『外典鈔』と略称）四巻は、唐の僧湛然『止観輔行伝弘決』十巻の注釈である。『止観輔行伝弘決』に引く大量の外典を抄出しこれに注した書だが、その巻一に一箇所（二条）のみ隋志を引いている。隋志、経、「讖緯」小序の文である。『外典鈔』自序につづく「外典目」末尾に「右弘決所引外典、依隋書、經、籍、志等、記目錄而備尋檢矣」とあり、隋志の参照は直接であつたことがわかる。この引用文には「世」字が三つふくまれるが、『外典鈔』原撰本では「世」字を缺筆していたと思しい。

『外典鈔』は、その自序に正暦二年（九九一）二月二十九日の日附をもち、唐滅亡の八十四年後の成立と判明する。現存する最古の『外典鈔』鈔本は天理図書館蔵五臣注『文選』巻二十殘巻の紙背にあり、その巻一大部分を鈔録する。表の五臣注『文選』殘巻が平安中期の重鈔本とみられることから、『外典鈔』零本の鈔写は平安末期を下らないという。「書体奇古」⁽³⁷⁾で原撰時の面目をおおく保っていると思われる。

肝心の三つの「世」字を天理本『外典鈔』はことごとく「𠂔」に作る。⁽³⁸⁾『集韻』（宋本）が「世、……古作𠂔」というが、「𠂔」は唐代に「世」を缺筆した変体字としても使用された。⁽³⁹⁾天理本を通覧すれば領会されるが、同本の『止観輔行伝弘決』からの抄録文と具平親王の引用文とは、通じて「世」を「𠂔」に作る。しかし「民」「治」等のほかの唐諱は常体字で避諱の痕跡は見られない。おそらく具平親王の使用した諸書のテキストは唐諱を缺筆により避諱していたが、親王は鈔写するにあたり末画をおぎなつて常体字に復したのだろう。親王が缺筆を保存する理由はなく、紙面の美觀を考慮すれば常体字をもつてするのが常識的な措置だ。そのなかで、特に改変する必要がないのは「𠂔」字である。「𠂔」を「世」の異体に見なせば改易は不要である。

『外典鈔』の成書年代を勘案すれば、具平親王の手にした漢籍が隋志をふくめ「世」を避諱した唐鈔本であるのは時期的にむしろ自然だ。隋志についていえば、『五代史志』上進の顯慶元年五月と「世」「民」単字の避諱がはじまる同二年十二月との間隔は、わずか二十箇月である。日本のみならず唐代におこなわれた隋志がほとんど「世」「民」を避諱した本であつたろうことは、この事実からも容易に推測される。

私が注目するのは、天理本における『帝王世紀』書名の表記である。天理本で具平親王は一箇所（二条）『帝王世紀』を引くが、書名の「世」が常体字なのである（二三三頁）。しかし、『止観輔行伝弘決』原文が引く『帝王世紀』の書名は「帝王^{イマ}世紀」に作る（二三〇頁）。天理本に常体字「世」が見えるのは、実に右「帝王世紀」の部分で唯一で、ほかはことごとく「世」に作る。これは、具平親王の実見した『帝王世紀』鈔本が「世」避諱以前のきわめてふるい鈔写になつたか、あるいはその重鈔本だからではないか。これを是とすれば、「世」「世」の差別は避諱の有無を表明しており、舶載された隋志が顯慶二年十二月以降の鈔本であることの一論拠たりうる。

では、隋志はいつ日本にもちこまれたのか。唐諱を避諱しない武周時代に渡唐した大寶度の遣唐使では、「世」を避諱した隋志の将来はむづかしからう。白村江の戦役前後の第四・五・六次遣唐使による将来も、当時の国際関係の緊張をかんがみれば困難と判断される。天智朝の遣使は緊張状況の継続下における外交儀礼的側面がつよいのでなおさらだ。⁽⁴⁰⁾

真備が典籍を蒐集するにあたつては、探書帳のようなリストがなければ効率のよい蒐書はできない。『日本国見在書目録』正史家の『東観漢記』註記から、真備の蒐書は秘閣の蔵書を利用しなかつたと思われるが、当時にあつて全きコレクションをなすには、秘閣の書目にもとづくのが一番のちかみちである。四巻の隋志はその用途によくなう。趙玄黙から講義をうけた真備は、隋志の重要性をおそわつていたであらうし、師より隋志の伝録をゆるさされたかもしれない。右記『東観漢記』細字註は、記載の巻数が隋志によること、当該鈔本が真備将来品であること

をいう。この記事と同註がひく真備の将来書「目錄注」の「真備在唐国多処營求、竟不得其具本」とを勘案すれば、真備が唐にあつて探書の台帳に隋志をもちいたという推定は現実味がある。『日本国見在書目錄』が隋志の巻数を記するのは、真備が具本か否かの判断を隋志ににおいだことを承知していたためではないか。「正史」概念の将来とあわせ、真備は隋志の初伝者としての適性をそなえている。

紀伝体への志向をうかがわせる「日本書紀」の名称と、真備の帰朝とはおそらく無縁ではない。私は「日本書紀」の初例が「古記」であることに着目する。「古記」の作者については大きく二説、大和長岡説と秦大麻呂説とがある。⁽⁴⁾史料的に不明確な点をのこしながら渡唐経験をもつ二人だが、ともに真備周辺の人物である。「古記」の成立は、真備が大宰府をへて奈良にかえった天平七年の三年後、同十年ころというのが通説である。真備から「古記」作者へ、紀伝体を正統の史体とする唐の史学知識の供与があれば、「古記」は『日本紀』を『日本書』の本紀へと容易によみかえられよう。

さきにふれた紀伝科の増長をはじめ、紀伝体への志向は、隋志以降の唐の新史学の流入がなければ説明しえない。遣唐使による数次の交渉をおもえば、むしろ流入しないほうが不自然だ。紀伝体を正統とする史観は同時に「通史」を排斥する史観でもあつた。最新の唐の史学が、『書紀』の倣つた「通史」体をば異端にみなした事実を、そして紀伝体を「正史」の体例に評価した事実を、奈良の知識人たちはどううけとめただろうか。私は、その反応の一つが「日本書紀」という名称の登場であつたと考ええる。奈良の史学家たちは、隋志が異端と断じた「通史」体による『書紀』を、最上に序列される紀伝体にふさわしい名義にあらためることで救済を図つたのではなからうか。それは、『書紀』の「正史」化、とでもいうような所為である。この新史学をはじめて日本にもちかへたのは、天平七年に帰朝した吉備真備であつたと思われる。真備の伝学を契機とした紀伝道の盛行を背景に、「古記」のごとく『書紀』を『日本書の紀』とする認識が、特に『書紀』の講書が再開された弘仁以後ひろまる、というのが私

の見通しである。⁽⁴²⁾

註

(1)

拙稿『日本書紀』書名論序説』佛敎大学大学院紀要三五、二〇〇七。以下、前稿と略する。名義を論じた諸研究は、すでに前稿で紹介済みなのでくりかえさない。私が書名の議論に加わるのは別に目的がある。本邦上代において、六朝文化の影響が色濃い下地に、唐の文化が本格的につたわるのが何時からか。この認定に、書名問題の解明は資するはずである。このことは、のちに少しくふれるであろう。

(2)

「通史」体史籍およびその流行については、戸川芳郎「帝紀と生成論——『帝王世紀』と三氣五運」『漢代の学術と文化』研文出版、二〇〇二、初出一九七六、尾崎康「通史の成立まで」『斯道文庫論集七』一九六八など参看。

(3)

現存文献中、類目としての「正史」の初出は隋志であるが、「正史」の語の使用はもうすこしさかのほり、梁・阮孝緒『正史削繁』に見える。この「正史」の意味するところは明白でない。隋志以前の用例は、もう一つある。現行『金楼子』戒子篇に見える「正史既見得失成敗、此経国之所急、五経之外、宜以正史為先」の記載だ。『太平御覧』卷六百十六、学部、誦誦も該文を引く。「五経」に準ずる所依の典籍として「正史」をあげている。これは、たとえば『法苑珠林』破邪篇の「案五

経正史、三皇已来並不云別有天尊、住於天上」とある用法によく似ている。『法苑珠林』の文章は引用文ではなく道世の手に成る地の文に読め、まずは隋志以降の用例になる。『金楼子』の「正史」の語は、隋志や『法苑珠林』の「正史」とならべて相違を見出しがたい。私見では、隋志の「正史」の類目名は、梁元帝朝の秘閣の分類に由来する可能性がある。四部の各名称を「経史子集」に呼んだ早い例は、梁末江陵の元帝朝がおこなった秘閣の蔵書整理であった。『北齊書』卷四十五、文苑、顔之推伝所引「觀我生賦」自注がこれをいう。勝村哲也「藝文類聚の条文構成と六朝目録との関連性について」(『東方学報』京都)六二、一九九〇)によれば、梁武帝がつくらせた類書『華林遍略』の条文排列は經子史集の順であった(一〇二頁)。常識的に、これは武帝朝建康の秘閣の分類を反映していると考えられる。秘閣の目録は実際の配架目録を兼ねているのが通常だから、書籍の配置換えをする機会がないかぎり、目録の分類法をあらためることはまずない。元帝は江陵で即位したので、新都への書籍移送はあらたな分類法採用の契機になっただろう。元帝の蔵書は十餘万卷(来新夏『古典目録学浅説』中華書局、二〇〇三、一一二頁)ともいわれるが、その整理には愛書家であった『金楼子』の撰者元帝の意向が反映されていたはずである。それが顔之推・師古をへて隋志

に影響した可能性は考えられてよい。ただし、「正史」への正統性の付与は、隋志に確立すると考えておくのが穩当に思われる。唐初が「正史」の編纂史上でも劃期であったとは、中国史学史でよく說かれることである。個人の著述から官僚すなわち「史官」による分担執筆に編纂法が変わつたのが唐初である。それは「正史」編纂権の国家による独占であるが、本文中で述べたように隋志が「正史」を史部冒頭に箇条し、ことさら「史官」の記述に筆を割くのは、編纂権の独占とおなじ目的下の造作であつたと考えられる。

- (4) 戸川芳郎「四部分類と史籍」東方学八四、一九九二、六頁。

- (5) 隋志の思想性についての記述は、おおく前掲、戸川「四部分類と史籍」に負っている。

- (6) 森博達『日本書紀の謎を解く 述作者は誰か』中央公論新社（中公新書）、一九九九、四九・一六四頁。

- (7) 小島憲之『上代日本文学与中国文学』上、塙書房、一九六二、三五四—三五五頁。

- (8) 『旧唐書』卷四、高宗紀、顯慶元年五月己卯条、および同書、卷七十三、李延寿伝。

- (9) 『五代史志』撰者の一人李延寿は、『五代史志』成書から間もない顯慶四年（六五九）に『北史』を著した。その巻百、序伝に『隋書十志』の文字がある。『五代史志』がその成書のおそくとも三年後には『隋書』に附屬して認識されていたことをうかがわせる。しかし、『史通』（七二〇成）は古今正史篇で『五代史志』について「太

宗崩後、刊勒始成其篇第、雖編入隋書、其実別行、俗呼為五代史志」と、『五代史志』の書名での単行をいう。同様の記事は「宋天聖二年隋書刊本原跋」にも見える。『隋書』への編入後も、それとは別に『五代史志』は單獨でもおこなわれていたようである。『旧唐書』經籍志には「五代史志」「隋書十志」の文字はなく、『隋書八十五卷 魏徵等撰』とのみある。旧志は開元年間成書の母呪『古今書録』を流用した目録なので、開元当時すでに『五代史志』は、すっかり『隋書』の一部であつたのだらう。

- (10) 東野治之「続日本紀」所載の漢文作品——漢籍の利用を中心に」『日本古代木簡の研究』塙書房、一九八三、初出一九九頁。

- (11) 私見では、范書からの直接引用に見える文章は、『華林遍略』に引かれた『東觀漢記』ほかからの間接引用と考えられる。これについては別稿「范曄『後漢書』の伝来と『日本書紀』」を留意している。

- (12) 前掲、東野「続日本紀」所載の漢文作品——漢籍の利用を中心に」一三三頁、および陳國慶（沢田昭次訳）『漢籍版本入門』研文出版、一九八四、一一六頁。

- (13) 陳垣『史諱举例』第六十 以為避諱回改而致誤例」參看。

- (14) 潤色が、「民」を缺筆でもつて避諱した『隋書』によつて、その末画をおぎなつて書したとすれば、後段の考証は無効となるが、その可能性はひどいと判断される。公的に缺筆を明言する史料の初出は顯德五年（六六〇）

の詔勅で、このうち缺筆は頻繁にもちいられた。すでに『五代史志』が成つて四年がすぎている。まず「治」字の使用に着目する。高宗朝は生諱を避諱していたので、高宗以降の鈔本は「治」をば避諱していたはずだ。現行『隋書』のCをみるに「民」の避諱は缺筆ではなく代字をとっていることが明らかなので、C「治」の避諱も「持」「理」等の代字によってなされたはずだ。Cが「治」なのは宋人が元字にもどしたのだろう。つまり、『隋書』のこの部分の唐諱を避けるやりかたは代字をもちいたと考えられる。無論、当該部分を缺筆した異本の使用は、可能性として全くは消えないのだが、『隋書』が奉勅撰であるため鈔写の機会がおおくなかつたであろうことから、当該『隋書』鈔本が「民」を缺筆していた蓋然性はひくいと考えられる。

- (15) 以下の論述はおおく、布目潮瀾「唐職制律の「上書奏事犯諱の条」について——避諱の系譜」『布目潮瀾中国史論集』上、汲古書院、二〇〇三、初出一九八六、および中村裕一「唐代史料にみえる「世民」両字の避諱」『唐代官文書研究』中文出版社、一九九一、初出一九八五に負っている。

- (16) 『旧唐書』卷二、太宗紀上、武徳九年六月己巳条にも取意文あり。

- (17) 銭大昕『廿二史考異』卷三十三「隋高祖紀上」も貞観の『隋書』成書の際、「其時不避世字、如王世積・陰世師・馮世基・薛世雄・虞世基諸人伝、皆未回避」という。

- (18) 王鳴盛『十七史商榷』卷七十「改昏葉宮」。

- (19)

顯慶二年以前の『隋書』鈔本をのちになつて入手したと想定すれば、舶載の下限は第八次遣唐使の帰国する開元六年＝養老二年までがかる。しかし、それが隋志を附属したかは、想定したいをふくめ疑問だ。唐代における書籍の獲得には非常の困難をともなつた。官僚の蔵書量はせいぜい数百巻、顔之推以前と同水準である。字書・韻書等の限られたものをのぞき、特定の書籍の入手はまづ無理だつた。かすくすい入手方法は伝録（転写）であつたが、底本の借用には相応の家柄・官位あるいは既蔵者とのコネクションが不可欠であつた。井上進「中国出版文化史」名古屋大学出版会、二〇〇二、九八一〇一頁参看。坂上康俊「書禁・禁書と法典の将来」（九州史学一二九、二〇〇一）は唐朝の書禁政策をのべ、あわせて唐内部における史書流通の低調、各遣唐使が書籍の入手に秘閣を利用せず基本は苦勞のおおい自前の探書活動であつたろうこと、指摘している。『隋書』は奉勅撰の史書である。ふるい鈔本の入手となると皇帝からの下賜品ではありえず、運よくふるい鈔本を借覧しても顯慶二年十二月以降の伝録であれば「民」を避諱したはずだ。朝鮮半島からの将来も一応考慮しておく必要があるが、唐本国での流通がひくい書籍が新羅等に豊富であるはずはなく、半島からの舶載にはおおきな限界があつただろう。奉勅撰の「正史」であればなおさら半島発の可能性はひくいと判断される。また大宝以前約三十年間の遣唐使中断期、漢籍の舶載が杜絶したわけではないけれど、それは限定的で過大な評価はできない。坂上康俊

「大宝律令制定前後における日中間の情報伝播」、『日中文化交流史叢書二 法律制度』大修館書店、一九九七参看。なお、白雉の遣唐使の史実性については、南友博「『日本書紀』白雉四年の遣唐使記事について」奈良史学一五、一九九七参看。

(20) 前掲、小島『上代日本文学与中国文学』上、三五五頁。

(21) 中村裕一『唐代公文書の研究』汲古書院、一九九六、八一―九頁。

(22) 『嚙』字避諱の種々のやりかたは、王彦坤編著『歴代避諱字匯典』中州古籍出版社、一九九七、六二―一六二五頁にくわしい。

(23) 前掲、藏中『則天文字の研究』二三―二五・一六一頁など参看。

(24) 前掲、小島『上代日本文学与中国文学』上、三五四―三五五頁。

(25) 前掲、藏中『則天文字の研究』六三―六七・七二頁。なお、岩崎本『書紀』推古紀に二箇所、「囙」字の使用がある旨報告されている。ただし『書紀』編纂のいつの時点で「囙」字がもちいられたかは分明でない。藏中同上書七六―七七頁参看。

(26) 『令集解』卷十三、賦役令の書入中に一箇所「隋書曰」と明記して二条が引用される。奥村郁三編著『令集解所引漢籍備考』関西大学出版部、二〇〇〇、三九〇―三九一頁参看。『令集解』の『隋書』引用はこれのみだが、両条中にあらわれる三つの「世」字は興味深い。出典はおのの『隋書』卷七十五、儒林、辛彦之伝と卷七十二、

孝義、郭儁伝とである。後者は『令集解』の「郭世、儁……七世共居」に現行郭儁伝「郭、儁……七葉共居」が対応する。前掲、王『歴代避諱字匯典』三九八頁の引く『歴代諱字譜』「唐太宗名世民……凡五世・七世・累世、皆以葉字代」の解説から明白であるが、現行『隋書』の字づらは顕慶二年十二月以降の唐代の避諱状況を保存している。また辛彦之伝現行本に『令集解』所引「曾祖……」の語句がないのは、そもそも「祖……父……」直前にあつた「曾祖……」句を現行本が落しているからで、書入者の手にした『隋書』は脱落前の正確な鈔本であつたはずだ。「又見齊書」といひながら該句が蕭子顯『南齊書』に見えないのは、この「齊書」が『日本国見在書目録』所載の李百葉または沈約『齊書』であつたからだろう。蕭書は『日本国見在書目録』に著録されておらず、書入の時期にもよるが当時未舶載と思しい。以上の表徴は書入者のよつた『隋書』が「世」単字避諱以前の原撰時の姿を保つたふるい系統の鈔本であつたことを示している。『令集解』成書は『書紀』撰上から約百五十年のちで書込はさらに遅れるにもかかわらず、書込者はあたらしい唐鈔本を利用していない。当該鈔本こそは、『書紀』編者の参照した『隋書』鈔本そのもの、あるいはその転写本ではなからうか。なお『備考』は、右両条を某類書からの孫引きとするが、『隋書』を載録した類書として適当な書の想定は困難である。これらは『隋書』からの直接引用に解すべきで、書入という特殊条件はこの見方を有利にする。

(27) 『書紀』 白雉五年七月条に、同年帰朝の遣唐使が「多

得文書宝物」の功により賞賜された旨記載がある。『隋書』舶載はこの時かもしれない。

(28) 『続日本紀』 天応元年(七八二)十一月壬申条の「明

経紀伝及陰陽医家、諸才能之士、賜絲各十綯」が、いまのところ「紀伝」の語の初出と思しい。ただ、同書天平宝字元年(七五七)十一月癸未条所載の詔勅が学生の読むべき典籍をならべているなかに「伝生者三史」の文字がある。桃裕行によれば、「伝生」とはのちの紀伝生の略称らしい。桃『上代学制の研究 修訂版』桃裕行著作集一、思文閣出版、一九九四、一四三頁。「伝生」の解釈は二説あるようだが、挙示されている書が三史(『史記』『漢書』と、おそらく范曄『後漢書』)であることからも、桃の推定は正鵠をえていると思われる。奈良時代なかば、特に三史をまなぶ学生がいたのである。「伝生」の二説については、古藤真平「文章科と紀伝道」古代学研究所研究紀要三、一九九三、五頁参照。なお、この天平宝字元年条が「三史」の本邦初例らしい。その十二年後の神護景雲三年(七六九)には大宰府が三史の下賜を乞い、『史記』以下の「正史」を賜っている(『続日本紀』同年十月甲辰条)。当時すでに「正史」すなわち紀伝体史籍への志向が顕著であったことのあらわれだろう。

(29) 『続日本紀』 同年三月丁亥条。

(30) 前掲、桃『上代学制の研究 修訂版』一四一—一四三頁。前掲、古藤「文章科と紀伝道」は、文章科設置(七二八年)以前に范曄『後漢書』をくわえた三史の教授が

あったという推測を述べ桃の推定を批判する(二—五頁)けれど、私は桃説を支持する。范書初伝の時期をふくめ詳細は別稿「范曄『後漢書』の伝来と『日本書紀』で論じるはずである。

(31) 内山直樹によれば、朝代名に「書」字をくわえた『漢書』の命名は、『尚書』の「虞書」「夏書」「商書」「周書」のあとを継承する意図によるという。そこには『漢書』を「尚書」諸科の保証する正統の王朝交替史に組み入れるという、より深長な意味がこめられていた。内山「史記」「漢書」の「書」「志」について——名称をめぐる瑣考」中国文化六二、二〇〇四、三—四頁。「正史」の「〇〇書」の冠は『漢書』である。「日本書」の命名があったとすれば、『尚書』とのかかりまで考慮したうえで可否か。

(32) 太田晶二郎「吉備真備の漢籍将来」『太田晶二郎著作集』一、吉川弘文館、一九九一参看。初出一九五九。

(33) 『旧唐書』 卷百八十五下、「新唐書」 卷百三十の両陽嶠伝。

(34) 『新唐書』 卷百九十九の馬懷素伝および『旧唐書』 卷四十六、経籍志序文を参看。

(35) 真備の目錄学研修については、前掲、太田「吉備真備の漢籍将来」註九・一五参看。

(36) 五臣注「文選」残卷等とともに『天理図書館善本叢書 漢籍之部』二、八木書店、一九八〇に影印。天理本の掲示頁数は影印本のそれ。

(37) 影印本の小川環樹「本文解説」。「小川環樹著作集」五、

筑摩書房、一九九七、二八頁。

(38) 影印本二四一頁。唯一の完本である宝永刊本、鎌倉時代の鈔写にかかる金沢文庫本はともに常体字「世」にくくり原撰本の旧を失している。

(39) 前掲、王『歴代避諱字匯典』三九九頁参看。

(40) 松田好弘「天智朝の外交について——壬申の乱との関連をめぐって」立命館文学四一五・四一六・四一七合併号、一九八〇、および新蔵正道「第五次遣唐使と六六六年の封禅の儀」古代史の研究八、一九九〇参看。

(41) 「古記」の研究史および現在の到達点は、宮部香織「大宝令注釈書「古記」について——研究史の整理と問題点」國學院大學日本文化研究所紀要九〇、二〇〇二を参看。

(42) 内典の玄昉と外典の真備と、この二人の帰朝の意味す

るものは、あたらしい唐の学藝の体系的将来であったとさだめられる。おそらく、それまでの学藝の面目を一新する事件であったろう。同時にそれは、日本の中国文化受容史のうえでも劃期であったと思われる。上代の早い時期に、おもに百済經由であったろうと推される六朝文化の受容があった。その基底のうえに唐の文化が本格的に流入しはじめた時期は従来漠然としていたが、まずは天平七年にもとめられるのではないか。それ以前にも唐との交渉はあったけれど、『書紀』が「通史」を志向したことは、唐文化の伝播が一面的であったことを告げている。唐の学藝を具現した二人と大量の典籍とは、上代の学藝に六朝風から唐風への質的变化をもたらした嚆矢であったと考えられる。

